放眼日中

中国を知っていればベトナムが分かるか

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

3年ぶりにベトナムを訪れた。前回はリーマン・ショック直前にホーチミンを訪れ、不動産の高騰や日系企業の進出増加などを見聞したが、今回は中部へ行った。ハノイ、ホーチミンに比べてゆったりとした街並みを堪能した。古都・ホイアンとフエは落ち着きがあり、日本人にとっては癒やされる、居心地良い街だろう。

しかし、中部の中心都市であるダナンでは郊外のリゾート開発、同市内の再開発が進み、急速な発展が垣間見られた。ハノイ、ホーチミンの余剰資金、中には「中国マネー」も流入し、急激に不動産価格が上昇、ダナンの一般庶民にとってマイホームは遠くなりつつある。日系企業の進出も徐々に増加している当地では、ワーカーを集めるのに苦労しており、地方からの出稼ぎ者の確保が課題のようだ。賃金や物価の上昇を考えると、ベトナムは本当に「チャイナ・プラス・ワン」と言えるのだろうか。

ベトナム在住の日本人と話していると、中国とベトナムの類似点が実に多いことに気付く。ベトナムに長く関わっている人は「ベトナムの制度、特に共産党のシステムは中国と殆ど同じ。良い点もあるが、今や悪い点が特に似てきている」と言う。地方幹部による強引な土地接収などで権利を奪われた人々がハノイに陳情に出掛け、デモ行進も行っているらしい。これも数年前の「北京陳情村」を想起させるもので、言論統制が厳しいベトナムでも少しずつ庶民の権利意識の高まりが感じられた。

ダナンからの帰りにホーチミンに寄り、3年間の比較を行った。以前より再開発がさらに進んでおり、最近は開発工事に関わる立ち退きが増え、政府の代替住居も追い付かない。不動産の高騰で補償金では住居を確保できない庶民は、自腹を切ってローンを組み、住宅を購入する羽目になっていた。しかし、老人をはじめローンを組めない人も続出し、今後社会問題化するのは必至。これも中国と酷似している。

そして、「中国で問題になった点はどのように解決されたのか」といった質問をベトナム人から幾つか受けた。きのうの中国はきょうのベトナムというわけで、今後の方向性を考える上で中国が辿った道は参考になるからだ。一方、中国に赴任した経験のある日本人がベトナムにやって来ても上手くいかないケースが見られる。「中国ではできたのになぜベトナムではできない」など、過去の成功体験を引きずり、対中感情が良くないベトナム人に向かって「中国ではこうだ、中国人はできた」などと、感情を逆なでするような言動をして失敗する例も聞いた。

確かにベトナムの生産性は中国の6～7割程度とも言われ、ベトナム人も「大量生産なら中国」と認めている。それでも、ベトナム人と中国人の性格は異なるし、歴史的な背景なども理解する必要がある。いずれにしてもベトナムは中国の後を追っているようであり、まずはこれを少し危険なシグナルと受け取り、その上で経営を考えるべきであろう。